

練習船のここだけの話 Vol.9

某大学における昔の経験

1. はじめに

令和2年9月に水産大学校（水大校）に特任部長として着任した猪又です。私は水大校の卒業生ではありませんが、本校と同じような学科やカリキュラムを有する長崎大学水産学部（長大水産）で学ぶ中で、乗船実習を経験しました。もう30年位前の話になりますが、ここに紹介したいと思います。なお、長大水産を巡るエピソードは、小学館少年サンデーコミックス『第九の波濤』にも描かれていますが、当時の私たちの学生生活は、様々な意味で漫画を超えたものでした。

2. 乗船する前の話

まず、私が長大水産に入学した当時から、悪名高き「早朝訓練」が実施されていました。それは、早朝に一年生全員が学校のグラウンドに集合し、上級生の指導の下、ランニングや筋トレ（例：腹筋数百回）、水産放浪歌の斉唱などを行うもので、新入生に有無を言わさぬものでした。事実、この早朝訓練が嫌で早々に退学した者もいます。これは今となっては30年前の思い出話で済まされますが、いくら大学と言えども今日では社会的に許容されないと思います。この点は『第九の波濤』にも断り書きがあるとおり、現在では長大水産で新入生を対象とした早朝訓練は行われておりませんし、もちろん水大校でも行っておりませんので念のため。

後でわかったことですが、これは学部の正式なカリキュラムではなく、あくまで自由参加の学生活動であったものの、必修科目である1年次の夏の海洋訓練のための体力強化のために行われていたものでした。そして夏の海洋訓練は、3年次に行う乗船実習の準備を兼ねていました。要するに長大水産の学生は、乗船実習をこなして卒業するため、入学早々から準備が求められていたのですが、当時、「大学に入ってこれからは自由に楽しく暮らすぞ」と思っていた我々が面食らったのは言うまでもありません。

もっとも、同期の全学生が参加して一週間の合宿形式で行われたその夏の海洋訓練は、辛いながらも楽しいものでした。私は数時間の遠泳は問題なくこなせた一方で、カッター実技はどうしても苦手でした（図1）。ご承知のとおりカッターは、非常に重くて長いオールを他者と同調させて漕がねばならないのですが、非力な私は良く前後のオールにからめてしまい、むしろ船にブレーキをかけていたからです。そのような時でも、カッター同乗の友人は（少しムカッとしたかもしれませんが）オールを私に合わせてくれたことを覚えています。



図1 海洋訓練でカッターを漕ぐ

3. 乗船中の話

長大水産では、水大校と同じように、全ての学科で乗船実習が必須となっており、生物生産系に進んだ私も、3年次に計二回、通算一カ月半にわたる乗船実習を経験しました。とは言うものの、私は乗船中のことはあまり覚えていません。それは、大昔のことであるだけでなく、私は船に弱い体質であり、航海中はほとんど船酔いの状態だったからです。特に、台風から遠ざかる途中のブリッジでのワッチは、船が大波を超える度にジェットコースターに乗って途中体が浮くような感覚になり、私は何かにしがみついで時間が過ぎるのをひたすら待っていました。結局のところワッチを含めた船内での作業は同級生が代わりにやってくれましたが、そのことで彼らが私を責めることはありませんでした（色々と思うところはあったかもしれませんが）。このように乗船実習は、陸上から隔絶された船上で体力も性格も違う若者多数が数週間にわたって共同生活・訓練を行うものですが、陸上にいただけでは分からない人間の弱さや強さ、優しさ、連帯を経験する場であったと思います。乗船実習を経験した同級生の彼らとは、今でも連絡を取り合う仲であり、正に生涯の知己を得たと言えます。



付図 練習船上の海水サンプリング
(出典：長崎大学 HP)

4. 社会人になって

なんとか大学を卒業し、幸運にも農林水産省に採用された私は、自分自身が船に乗ることはあまりありませんでしたが、水産資源調査船や漁業取締船の運航を含めて、海、船、魚に関する行政に関与してきました（具体的な話はまた別の機会ということで）。これまでを振り返ってわかるのは、船乗り求められる規律や協力の精神などのシーマンシップは、決して船に限られた特殊なしきたりではなく、行政も含めた陸上の業務にもあてはまるということです。例えば時間を遵守しつつ自らの役割を確実にこなすことや、自主的に他者と協力することは、至極当たり前の様でいて、なかなか徹底できるものではありません。これらは日々の実行があってはじめて身につくものです。この点乗船実習は、将来船乗りにならない学生にとっても貴重な自己鍛錬の機会だと思います。もちろん私は大学運営に携わる立場として、戦時下に遡るような精神論・根性論を正当化するつもりはありませんが、人権の尊重や男女共同参画など、今日的な観点をきちんと踏まえた上で、乗船実習を含めた水産系大学教育の良いところは活かしていくべきではないかと考えます。また、そのためにもコロナ問題が早く収束することを願ってやみません。

(水産大学校 特任部長 猪又秀夫)